道 徳 科 学 習 指 導 案

授　業　者　　中　野　浩　瑞
学年・学級　　２　年　２　組
場　　所　　２　年　２　組

１　主　題　「大切な友達がいることで」【B　友情，信頼】
（教材「けんかをしたけど」『きみがいちばん　ひかるとき　２年』光村図書）

２　授業づくりについて

本学級の子どもたちは，新しいクラスにも慣れ，仲の良い友達が増えたり，１年生の頃よりも友達との仲が深まったりと良好な友達関係を築いている。このような，友達関係の広がりや深まりは，子どもたちの生活を充実させる要因となっている。一方で，喧嘩をする場面も増えてきた。例えば，自分と友達のしたい遊びが異なり，「〇〇さんは自分のことを分かってくれない。自分のことが好きじゃないんだ。」と考え喧嘩になることがある。このように，子どもたちは物事を自分中心に考えてしまい，思いの違いを理解することができず，自分のことを大事にしてくれていないと誤解してしまうことがある。

そこで本主題を通して，友達と仲良くすることのよさについて考え，友達と仲良く助け合おうとする心情を養いたい。友達と色々な経験や感情を共有し嬉しい気持ちになったり，困った時に支え合ったりした経験は多くの人にあるだろう。このように友達は人が生きていく中で，大きな力になる。しかし，人にはそれぞれの思いや考えがあり，その時々の感情も違う。そのことが要因となり喧嘩をし，友達関係が希薄になってしまうこともある。自己中心性が残る低学年の子どもたちは，相手が自分と同じ考えをもっているだろうと考えてしまうことも少なくない。その結果，相手と思いや考えが違う時には，相手は自分のことを受け入れてくれていないと感じ，友情関係に亀裂が入ることがある。つまり友達関係は築くことだけでなく，維持し，関係を深めていく必要がある。ここで大切なことは，友達と仲良くすることのよさを実感することである。その実感があれば，例え喧嘩をしたとしても，友達でいたいと願う前向きな気持ちから，歩み寄ろうとするだろう。これが友情関係の維持や深まりにつながる。そこで本時では「仲直り」という事象に着目する。人が仲直りをしたいと願う気持ちは，目の前の友達と仲良くすることのよさを感じているからこそ生まれる。つまり，仲直りという事象への着目は，友達の大切さを改めて感じたり，よさに気付いたりする機会となる。今回扱う教材「けんかをしたけど」は，「ぼく」が仲良しのしんごが作った泥だんごを間違えて踏んでしまい，喧嘩になってしまう話である。一緒に遊ばなくなった２人だったが，しんごと仲良く過ごしていた時のことを思い出すと「ぼく」の心に仲直りをしたいという思いが溢れ，次の日に仲直りをするという話である。教材には，喧嘩をし，仲直りをする過程が描かれており，客観的に「仲直り」までの事象を捉えやすい。さらに，子どもの生活に近い内容であり，登場人物に自我関与しやすい。そのことから本教材は本主題を考えることに適しているといえる。

指導にあたっては，次の２点大切にしたい。１点目は役割（視点）取得能力を高めるための発問の設定である。大切などろだんごを壊されたしんごと，壊してしまった「ぼく」双方の気持ちを考えられる発問を設定する。そのことにより複数の立場を想像する機会となり，他者視点を醸成することにつながるだろう。２点目は，自己を見つめる学びを促すために，考えをキーワード化する活動である。子どもたちは，授業の中で道徳的価値に関わる考えを表出する。それらをもとに，自己を見つめ，自己理解を深めていくことが道徳科の学びの一つである。つまり，子どもから表出した道徳的価値に関わる考えは，自己を客観視することが難しいこの期の子どもにとって，自己を見つめるための窓口としての機能がある。しかし，時に考えが曖昧で，窓口としての機能を果たせないことがある。そこで授業内で表出した考えをキーワード化する活動を行いたい。例えば，「友達がいると早く学校に行きたくなる。」「友達がいると楽しい遊びができる。」などの発言が出た際に，「この考えをキーワードにするなら何にする？」などと問い「元気をくれる」等のキーワードをつけるということである。そうすることでキーワードを窓口をとしながら自己を見つめる学びを促すことにつなげたい。

３　本時の展開

（１）ねらい

喧嘩をした「ぼく」としんごが仲直りをする事象を通して，友達と仲良くすることのよさについて考え，友達と仲良く助け合おうとする道徳的心情を養う。

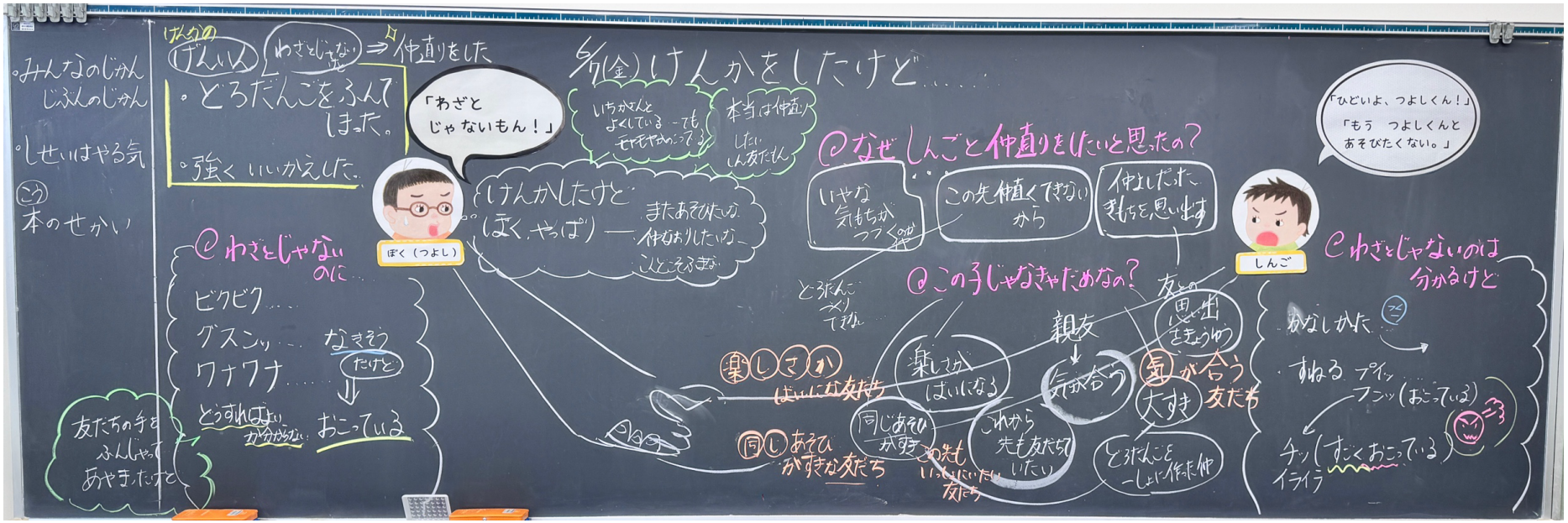
（２）展　開

学習活動	主な発問と予想される子どもの反応	教師の働きかけ
１　友達と喧嘩をした時のことを想起する。	○友達とケンカをしたことがありますか。 ・ある。嫌なことをされた。 ・あるけど，すぐに仲直りをした。 ・ない。	・教材理解を促し，登場人物の気持ちに自我関与しやすくするために，教材と同じ状況である喧嘩をした時の経験を問う。
【学習問題】ぼくはなぜしんごと仲直りをしたいと思ったのだろう。		
２　教材文「けんかをしたけど」を読んで，話し合う。	○（わざとじゃないことは分かりつつも）どろだんごを壊された時，しんごはどんな気持ちだっただろう。 ・嫌だな。一生懸命作ったのに。（悲しみ） ・なんで壊したの？（怒り） ・わざとなら仕方がないよな。でも。（弱さ） ○しんごに「もう遊びたくない。」と言われたぼくはどんな気持ちだっただろう。 ・わざとじゃないから仕方ないのに。 ・許してくれてもいいじゃないか。 ・ごめん。でもどうしたらいいかわからない。 ・やってしまった。 ○ぼくは「けんかをしたけど，ぼく，やっぱり。」の後に何とつぶやいただろう。 ・仲直りがしたい。 ・しんじくんと友達でいたい。 ・しんじくんと仲良しでいたい。 ◎ぼくはなぜ，しんごと仲直りをしたいと思ったのだろう。 ・<u>しんごと</u>友達でいたいと思ったから。 ・しんごと楽しく遊んでいた時のことを思い出したから。 ・相手のことを大切にしたいと思う気持ちになったから。 ・友達の大切さに気づいたから。	・喧嘩をしてしまった時の気持ちを想起できるようにするために喧嘩をした「ぼく」の気持ちを問う。 ・役割取得能力を養うために泥だんごを壊された時の「しんご」の気持ちだけでなく，反対の「ぼく」の気持ちについても考える。その際に，人物の気持ちを想像する助けとなるよう，動作化を取り入れる。 ・友達と仲良くするよさを実感できるようにするために，「しんごじゃなきゃダメなの？」などと問い，なぜその子と仲直りをしたいかを考えられるようにする。合わせて，実生活と結びつけて考えられるように，自身の友達を想起できるように問う。
３　本時の学習を振り返る。	○今日の授業の中で自分にとって一番学びになったものは何だろう。 ・仲直りがしたいと思うことは，友達を大切にしたい気持ちがあることがわかった。 ・友達がいるだけでやっぱり元気が出るんだなと思った。自分も友達にいつも元気をもらっていた。	・自己を見つめる学びを促すために，表出した考えに対してキーワード化していくように問う。学習状況を見ながら，子ども達だけでキーワード化が難しい場合は，教師がキーワード化を補助する。

（３）評価の観点

・「ぼく」としんごの喧嘩や仲直りについて，自分との関わりの中で考えようとしていたか。

・怒ってしまったしんごや，仲直りをしたいと思って自分から思い切って謝った「ぼく」の姿を様々な立場と状況から考え，友だちと対話する中で道徳的な見方・考え方を働かせようとしていたか。


5/7(金)けんかをしたけど……
けんかの
げんいん
わざとじゃない
⇒仲直りをした
・どろだんごをふんでしまった。
・強くいいかえした。
「わざとじゃないもん！」
ぼく（つよし）
けんかしたけど
ぼくやっぱ
またあそびたいな
仲なおりしたいな
こんとこえらまな
いちかさんとよくしている
でもやめようって
本当は仲直りしたい
しん友だち
@なぜしんごと仲直りをしたいと思ったの？
いやな気もちがつづくから
この先仲よくできないから
仲よしだったきもちを思い出す
どろだんごぶつけてきた
@この子じゃなきゃだめなの？
楽しさが
ばいになる
同じあそびがすき
これから先も友だちでいたい
この先もいっしょにいたい友だち
親友
気が合う
友との思い出
きょうゆう
気が合う
大すき
友だち
どろんこをいっしょに作った仲
楽しさが
ばいになる
友だち
同じあそびがすきな友だち
しんご
「ひどいよ、つよしくん！」
「もう つよしくんとあそびたくない。」
@わざとじゃないのは分かるけど
かなしかった
すねる
プイッ
フンッ（おこっている）
チッ（すごくおこっている）
イライラ
@わざとじゃないのに
ビクビク……
グスンッ……
ワナワナ……
なきそう
たけど
どうすればよいか分からない
おこっている
友だちの手をふんじゃってあやまったけど
・みんなのじかん
じぶんのじかん
・しせいはやる気
こう
本のせかい